

国際教育協力事業における教育実践型研修の試み

— 筑波大学附属桐が丘特別支援学校におけるボリビア多民族国研修生の事例を通して —

左藤 敦子** 花岡 勇太***** 吉沢 祥子***** 間々田 和彦*** 日高 雄之****
野村 勝彦***** 沼澤 聡子***** 安藤 隆男* 四日市 章**

本稿では、筑波大学附属桐が丘特別支援学校で実施したボリビア多民族国の特別支援教育研修生への教育実践型研修の概要をまとめ、国際教育協力事業としての教育実践型研修の今後の展開について考察した。その結果、日本の特別支援教育における教育実習および現職教員研修等で蓄積してきたノウハウが国際教育協りに深く寄与することが示された。

今後、多様な文化や教育システムに柔軟に対応しうる指導案の枠組みを精査し、研究授業を中心に据えた研修プログラムを再構築することにより教育実践型研修の充実が期待される。

キー・ワード：国際教育協力，教育実践型研修，研究授業，ボリビア多民族国

I 背景と目的

特別支援教育において国際教育協力の重要性が指摘される中、学校建設や教育機器の提供などのハード面に対する協力だけではなく、本邦で蓄積された質の高い教育内容・方法、教育課程、教員養成・研修などのソフト面に対する協力も求められている。それに応える試みとして、授業研究や学校行事を含む「日本型教育実践 (Japanese Education Model)」の発信や双方向型の「国際協働授業研究モデル」に関する知見等が報告されている (中田, 2008; 田中, 2008)。このように、日本の「優れた実践 (good practice)」の発信の有効性について言及されているものの (佐藤, 2008)、「優れた実践 (good practice)」に基盤を置いた国際教育協力の実績は多いとはいえない。

このような現状の中で、教育実践に基盤を置いた研修プログラムを活用した、「ボリビア多民族国特別支援教育教員養成プロジェクト (2010～2014年度)」が展開された。このプロジェクトは、「ボリビア国の特別支援教育を担う中核的人材を育成する」という目的を掲げ、筑波大学附属特別支援学校の協力のもと、筑波大学特別支援教育研究センターおよび国際協力機構 (以下、JICA) との連携により実現したものである。

本研究においては、筑波大学附属桐が丘特別支援学校で実施された教育実践型研修がどのように展開されたの

かについて概観し、その成果と課題について考察することを目的とする。

II 教育実践に基盤をおいた本邦研修プログラム

1. 研修期間

平成24年6月11日から6月22日に実施された。

2. 研修参加者

特別支援教育に関する知識と実践力をもつ中核的人材養成の目標達成のために、新規教員養成学校と特別支援学校パイロット校から選出された運動障害領域を主とする研修生5名であった (内訳：教員養成学校教員2名、パイロット校教員3名)。

3. 教育実践型研修プログラムの内容

教育実習および現職教員研修で蓄積された研修に関する知見を基盤として研修プログラムを組んだ。プログラムの内容は、①授業参観、②講義、③演習・実習、④関連機関の見学によって構成された (Table 1)。

③演習・実習に組み込まれている授業研究の実施に向けて、①授業参観と②講義において、授業構成や指導案の基礎的な知識を深めることを目標とした。

児童の実態把握については、研修プログラムに含まれる授業参観や講義の時間も活用して、児童の様子や指導目標について説明を行うとともに、児童と日々の学校活動を共にする機会も設けられた。

*筑波大学人間系 **特別支援教育研究センター ***筑波大学附属視覚特別支援学校 ****筑波大学附属聴覚特別支援学校

*****筑波大学附属桐が丘特別支援学校 *****筑波大学附属久里浜特別支援学校 *****作新学院大学

Table 1 附属桐が丘特別支援学校における研修内容

研修形態	研修内容
授業参観	<ul style="list-style-type: none"> ・小学部（教科教育，自立活動） ・中学部（教科教育，自立活動） ・高等部（進路指導，情報） ・施設併設の小中学部
講義	<ul style="list-style-type: none"> ・学校概要 ・自立活動指導 ・進路指導 ・重度重複教育 ・知覚運動学習・視知覚認知 ・障がい特性とアセスメント ・個別の指導計画 ・地域支援 ・学校支援 ・教科指導（算数指導，教材研究）
演習・実習	<ul style="list-style-type: none"> ・授業研究（モデル授業参観，授業案の作成，教材作成，リハーサル，検討・討議） ・個別の指導計画（子どもの実態把握，個別の指導計画作成）
見学	<ul style="list-style-type: none"> ・心身障害児総合医療療育センター ・障害者職能訓練センター

なお、「ボリビア多民族国特別支援教育教員養成プロジェクト」全体の概要については、左藤・池田・安藤・四日市・藤原・長崎・間々田・日高・吉沢・佐藤・野村・沼澤（2013）にまとめられている。

Ⅲ 授業研究の実施と評価

授業研究は、①モデル授業の参観、②児童生徒の指導目標および指導内容の設定（指導略案の作成）、③授業研究の実施、④授業研究のまとめ、の手続きを経て行われた。

1. モデル授業の参観

モデル授業は小学部3年生～4年生の体育の「聴いて・見て運動しよう／風船で遊ぼう」という単元であった。本単元の目標は、①ホイッスルの音やハンドサインの合図にあわせて素早く判断し、運動することができること、②仲間と協力して、風船を落とさずに運ぶことができることであり、合図にあわせて指定されたパイロンに集まるといった授業内容であった。指導略案を Table 2 示した。

次に、研究授業を受ける児童に関する個別の評価基準

を Table 3 に示した。授業研究を受ける児童の実態は様々で、自分で走ることができる児童や車椅子による移動が可能な児童、車椅子による移動が困難な児童があり、単元における個々の目標が異なることについて説明が行われた。

2. 指導略案の作成と授業の実施

授業参観および講義を通して得られた児童の実態にあわせて、授業研究の指導略案の作成を求めた。

授業研究の対象は、モデル授業を受けた小学部3～4年生の児童であった。単元の目標は「コミュニケーション力を高める」であり、簡単なルールに従って行うボールゲームの授業であった。この単元目標は、研修生らが協議して設定したものであった。作成された指導略案について、以下の点について修正が求められた。

①チーム内のコミュニケーションを高めるにはどうしたらよいかを話し合う時間設定が長すぎて、児童の活動時間が少ない。

②スペイン語の通訳を交えながら授業を進めるということとを考慮すると全体的な時間配分を再度考える必要が

Table2 モデル授業における指導略案

単元名：聞いて・見て運動しよう／風船を運ぼう

本単元の目標：ホイッスルの音やハンドサイン（グー・パー）の合図にあわせて素早く判断し、運動することができる。仲間と協力して、落とさずに風船を運ぶことができる。

	学習活動	指導上の留意点（手だて・配慮等）	評価のポイント
導入	○挨拶・体調確認 ○5分間走	・自分の体調や運動に使用する車いすなどの状態を端的に伝えるように促す。 ・一定のペースで走ることを意識づける。 ・お互いにぶつからないように周りの状況を見たり、声をかけあったりするに促す。	
展開	○音にあわせて動こう ・笛1回で赤パイロン、笛2回で白パイロンに集まる。 ・1つのパイロンに集まる人数制限のルールを追加する。	・自分の近くにあるパイロンを素早く探すように促す。 ・自分がパイロンに集まるだけでなく、1つのパイロンに集まっている人数などを確認することを強調する。 ・見方や動き方が理解できていない様子がみられた場合、止まった状態で見えるポイントや動きのポイントを確認する。	●観察（技） ●発言（知・理）
	○ハンドサインを見て動こう ・グーで赤パイロン、パーで白パイロンに集まる。 ・1つのパイロンに集まる人数制限のルールを追加する。	・ハンドサインが出たらすぐに動けるように、動きながらサインを出す教員を見るように促す。 ・見方や動き方が理解できていない様子がみられた場合、止まった状態で見えるポイントや動きのポイントを確認する。	●観察（技） ●発言（知・理）
まとめ	○ポイントを確認する	・それぞれの児童の発言をまとめながら、全体でポイントを確認していく。	●発言（知・理）

Table3 モデル授業の単元における個々の評価基準

児童	運動の技能	運動についての知識・理解
A, B, C, D, E	合図に応じて、 <u>自分の近くにある</u> パイロンを素早く見つけ、移動することができる。	パイロンに集まっている人数をみて判断し、移動するパイロンを変更することができる。
F, G, H, I, J	合図に応じたパイロンを素早く見つけ、移動することができる。	パイロンに集まっている人数を周りの声かけなどから判断し、移動するパイロンを変更することができる。
K, L		パイロンに集まっている人数を周りの声かけ等から判断し、移動するパイロンを変更しようとすることができる。

単元名：聴いて・見て運動しよう

Table4 授業研究の指導略案

学 年：小学部3，4年生 12名

教 師：ボリビア研修生5名

単 元 名：ゲームを通じた集団行動

単元の目標：児童同士が絆を深め合い、コミュニケーションをはかり、協力しあうような身体的活動を通して集団行動を学ぶ。

時間	学習活動	教授内容	児童の活動内容	教材・教具
5分	挨拶	<ul style="list-style-type: none"> ・教師が児童に挨拶をする。 ・担当の児童に名前カードを渡す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・コートを中心に集まり、挨拶をする。 ・返事をする。 	名前カード
5分	授業概要説明	<ul style="list-style-type: none"> ・パイロンを使った活動内容を説明する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教師を見て、話を聞く。 	ボード、パイロン、テープ
5分	ウォーミングアップ	<ul style="list-style-type: none"> ・4列に分かれ、笛の合図で走り始める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・コートの手前から端まで走る。パイロンを回って戻ってくる。 	
5分	水分補給	<ul style="list-style-type: none"> ・活動の終わりを笛で知らせ、水分補給をさせる。 		水、タオル
3分	単元の目標の説明	<ul style="list-style-type: none"> ・自由に2つのグループを作る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・2つのグループに分かれて、陣地を決める。 	
10分	ルールの説明	<ul style="list-style-type: none"> ・ルールの説明を落ちついて行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・児童は、相手チームにボールをとられないように、反対側のゴールにボールを投げる。 	ボール
8分	活動の振り返り	<ul style="list-style-type: none"> ・ゲームについて児童の意見や考えを聞く ・活動の重要なポイントを確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・児童はゲームについて振り返り、活動のポイントについて考える 	

ある。

③パスを受け渡すルールが不明確である。ボールをキャッチできない児童についてのルール設定した方がよい。

完成した指導略案をもとに、授業研究を実施した(Table4)。通訳を介するため指示が通りにくく、普段の授業と異なる手順であったため、授業前半には児童に戸惑いもみられたが、授業が進むにつれて研修生の説明する内容を理解しようと集中する姿がみられた。しかし、想定していた以上にゲームルールの説明に時間を要したため、計画していた「活動の振り返り」を十分に行うことができなかった。

3. 授業研究のまとめ

授業研究実施後に、まとめを行った。研修担当者からは、授業参観や講義に加えて、授業研究を実施したことによって相互に学ぶべき点があり、意義深い研修プログラムであったとの評価が得られた。複数の研修生に対して1名の通訳者であったため、研修生と児童間のコミュニケーションが円滑に進まない場面もみられたが、授業研究全体を通して、児童も身振りやジェスチャーを交え

ながらも意欲的に活動していた。ボリビア多民族国研修生の感想等からも、ほぼ目標は達成されていたと考えられる。授業研究に関するボリビア多民族国研修生の主な感想は以下のとおりであった。

- ①児童の実態に対して指導目標が妥当であったのか、考えさせられた。
- ②指導略案を作成することによって系統だった指導が可能となることや、授業に臨む安心感が得られ、指導略案を作成する長所が理解できた。
- ③何を記載したらよいかかわからず、指導略案の作成に時間がかかってしまった。
- ④指導略案は、他の教員にもわかるように記載することが重要だと思う。
- ⑤英語も使用したが、うまく通じずコミュニケーションに制約があった。学生の頃に学んだ「ことばだけではなく体で表現すること」の重要性を感じた。
- ⑥指導略案については理解しているつもりであったが、実際に作成してみると思い描いていたものと違っている部分もあった。教員の働きかけに対する子どもの反応を事前に考えることが必要であることを学んだ。
- ⑦研修生の立場や出身地域が異なっていたため、用語の

使い方や認識のズレがあり、合意が難しい場面もあった反面、様々な立場で意見を交わす経験ができて有意義であった。

⑧個別の指導計画が先にあり、指導略案を作成していくことが大事であることをボリビア国の同僚に伝えたい。

IV 教育実践型実習の可能性と課題

1. 授業研究の可能性

本研修においては、使用言語の違いによるコミュニケーションの難しさを想定し、言語による影響が少ないと考えられた体育を授業研究として扱ったところ、児童と研修生とのコミュニケーションに大きな支障はみられなかった。海外の研修生に向けての授業研究としては音楽科を扱ったという報告もあり（野村・安藤・四日市・藤原・長崎・左藤・間々田・日高・吉沢・沼澤、2013）、使用言語による影響が少ない教科や指導内容を選定することは不可欠であろう。しかしながら、授業の進行に使用言語の違いが影響を及ぼす場面も少なからずみられたことから、使用言語の差異や通訳を介した授業研究の実施の難しさも浮き彫りとなった。

これらのことから、授業研究の内容の選定に際して使用言語による影響を緩和することとあわせて、視覚教材等を活用した、ことばに依存しない教示の工夫やユニバーサルデザインの視点を取り入れた指導案の枠組みを授業研究に位置づけることによって、より実践的な研修が実現できるのではないかと推察される。

また、使用言語の差異による影響や任国の教育システムや教育観、文化の差異などを鑑みると、授業構成の詳細に関する理解を深めるよりも、指導略案の作成の意義を理解することを目標として、「児童生徒の実態把握」から「指導目標の設定」、「指導内容の設定」から「評価」に至る授業の流れを意識することが重要であると考えられる。

2. 事前研修・事後研修体制の構築と充実

本研修においては、授業研究を中心に据え、10日間にわたる教育実践型研修プログラムを実施した。そのため、授業研究の対象となる児童の実態把握を行う時間をより多く確保することが可能であった。しかしながら、これだけの長期にわたる研修の実施は稀なケースであり、大多数の研修は短期間で行うことが求められることが想定される。授業研究等が含まれる教育実践型プログラムの実施にあたっては、本邦研修の事前研修のプログ

ラムとして、日本の教育システムやカリキュラム、特別支援教育の理念等に加えて、アセスメントや子どもの実態把握に関する内容を盛り込むことは重要であり、本研修の事前事後の時間を効率的に活用して学べるような研修プログラムの内容の精査が不可欠であろう。

左藤ら（2013）の指摘にもあるように、教育内容・方法、教育課程、教員養成・研修等のソフト面について、研修後の継続的な支援の展開が求められている。今後、インターネット環境を活用したフォローアップ体制の構築の可能性等も視野に入れた検討が必要ではないかと考える。

本研修においては、研修担当者に対する任国の教育体制や教育課程等に関する情報提供が不十分であった。特に、本研修の対象となったボリビア多民族国の教育課程は、教科教育の枠をとりはらった「総合学習」を柱とした教育課程が整備されていたことから、日本のものとは異なり、指導案作成の際に議論が噛み合わない状況が生じた。国際教育協力事業の対象となる国の場合、教育制度や教育課程が整備の途上であり、十分な情報が入手できないことも考えられるが、必要に応じて、特別支援教育以外でも展開されている国際教育協力事業リソースも積極的に活用していくべきであろう。

V まとめ

本研修については、教育実習および現職教員研修等で培ってきた研修のノウハウを活用して実施された。従来より蓄積されてきた研修の知見およびノウハウが、国際教育協力事業に寄与するところが大きいことが、本研修の実践によって明らかとなった。特別支援教育における国際教育協力の実績は数少ないが、このような事例を積み重ねることによって、より充実した研修プログラムへと発展していく可能性がうかがえる。今後、多様な文化や教育システムに柔軟に対応しうる指導案の枠組みや研修内容を精査し、授業研究を中心に据えた研修プログラムを再構築することが望まれる。

謝辞

ボリビア多民族国研修生に向けての教育実践型研修の実施にあたって、筑波大学附属桐が丘特別支援学校の諸先生方に多大なるご協力をいただきましたことを感謝申し上げます。

付記

本研究は、平成 23～24 年度科学研究費補助金「挑戦的萌芽研究（課題番号：23653314，研究代表：安藤隆男）」の助成を受け、独立行政法人国際協力機構との連携により実施したものである。

引用文献

中田英雄（2008）国際協働授業研究モデルの開発. 比較教育学研究, 36, 134-146.

野村勝彦・安藤隆男・四日市章・藤原義博・長崎勤・左藤敦子・間々田和彦・日高雄之・吉沢祥子・沼澤聡子（2013）ボリビア国研修生に対する実践型研修の試み - 筑波大学附属大塚特別支援学校における模擬授業を事例として -. 筑波大学特別支援教

育研究, 7, 19-33.

左藤敦子・池田彩乃・安藤隆男・四日市章・藤原義博・長崎勤・間々田和彦・日高雄之・吉沢祥子・佐藤孝二・野村勝彦・沼澤聡子（2013）国際教育協力事業における教育実践を基盤とした研修プログラムの構築 - ボリビア多民族国研修生を対象とした事例を通して -. 障害科学研究, 37, 65-76.

佐藤真理子（2008）国際的視点からみた日本型教育実践による協力. 比較教育学研究, 36, 155-159.

田中統治（2008）日本型教育実践はアジアで共有できるか?. 比較教育学研究, 36, 147-154.

筑波大学特別支援教育研究センター（2008）「国際協力イニシアチブ」教育協力拠点形成事業資料集.

An attempt at hands-on training to the trainees from the Plurinational State of Bolivia

— A case study in special needs education school for the physically challenged, University of Tsukuba—

Atsuko SATO ** Yuta HANAOKA ***** Sachiko YOSHIKAWA ***** Kazuhiko MAMADA *** Takeyuki HIDAKA ****
Katsuhiko NOMURA ***** Toshiko NUMAZAWA ***** Takao ANDO * Akira YOKKAICHI **

* Faculty of Human Sciences, University of Tsukuba

** Special Needs Education Research Center, University of Tsukuba

*** Special Needs Education School for the Visually Impaired, University of Tsukuba

**** Special Needs Education School for the Deaf, University of Tsukuba

***** Special Needs Education School for the the Physically Challenged, University of Tsukuba

***** Special Needs Education School for the Children with Autism, University of Tsukuba

***** Sakushin Gakuin University